

## 1. 研究主題設定の理由

2020年度より4年間、国語科を研究教科とし、読解力をつける取り組みを行った。この取り組みの成果として、語のまとまりに注意してすらすら読めるようになり、接続語に着目して文章の構成をとらえることができるようになったことがあげられる。反対に課題として、語彙が少ないこと、図や資料から分かることを読み取る力が弱いこと、自分の思いや考えを的確に表現し、交流する力が弱いことなども明らかになってきた。

令和5年度の全国学力・学習状況調査の結果からは、A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むことの領域では、全国平均を上回っていたが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」は全国平均より1.2ポイント下回っていることが分かった。また「情報の扱い方に関する事項」は全国平均よりわずかに1.1ポイント上回っているだけであった。

さらに児童質問紙からは、「自分には、良いところがあると思う」の項目について、肯定的な回答は、73.2%と大阪市や全国の割合より、低いことも分かった。

そこで研究主題を「語彙を増やし、自分の思いを伝える子を育てる」とし、自分の思いをより正確に相互に伝え合うことで、互いの気持ちを理解し、自尊感情を高めることに主眼を置いた。

## 2. 研究の趣旨

自尊感情を高めるためには、自己有用感をできるだけ感じられる経験を積む必要がある。児童はもとより、「人のために何かをしたい」という気持ちを持っている。しかしその気持ちを満たす行動をとるためには、コミュニケーションの方法が分かり、その方法に基づいた行動がとれなければならない。そこで9年前からソーシャルスキルトレーニングに取り組んできた。結果としてコミュニケーション能力がある程度身に付き、少しずつ自尊感情の高まりにつながっている。

さらに、その気持ちを高めるために、周囲の人たちがどのような気持ちでいるのかがよく分かり、自分の考えをより正確に伝えられることが肝要であると考え、これまでの研究を大切にしながら、表現力をより確実に身に付けることを狙って国語科の研究と次年度から始まる総合的読解力育成カリキュラムの研究を進めた。

## 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、以下のように取組を進めた。

取組① 語彙力を高める工夫をする。

- 言葉集め
- 漢字ノートの工夫
- 漢字検定に全学年で挑戦（「対義語」や「同音異字」、「類義語」、「熟語の構成」の学習）
- 辞書の利用（中学年以上の各教室近くの廊下に常設）
- 新聞を廊下に常設、掲示
- 図書館開放
- 読書週間（10分間読書、ボランティアによるお話会）

#### 取組②国語科の学習の流れを明確にする。

○「読む領域」の学習では、特に流れを全学年でそろえた

- 1: 学習の見通しをもつ
- 2: 初発の感想を基に、文章構成や話の大体をつかむ
- 3: 図や資料に着目し、本文を要約し読み進める
- 4: 考えたことや思ったこと、調べたことをまとめる

#### 取組③書く力を高める手立てを講じる。

○何を、どのように、どのくらい書くか、内容や書く順番、使う言葉、書く量をはっきり示す

#### 取組④ソーシャルスキルトレーニングに取り組む。

- 自分の思いを正確に伝え、相手の思いを読み取り、受け止めるための技術の習得
- 年間指導計画

#### 取組⑤総合的読解力育成カリキュラムに取り組む。

○情報を読み取る→考えを形成し、交流する→考えを表現する

### 4. 研究の成果と今後の課題

#### (1) 研究の成果

- いろいろな言葉に興味を持ち、調べたい、使ってみようと意欲的になった児童が増えた。
- 熟語の意味を理解し、その意味に合った文を書くことができるようになった。
- 図書館開放を楽しみにしている児童が増え、読書に興味を持つことができた。
- 国語科の学習の流れが分かるので、次に何をするか見通しをもって取り組む様子が見られた。
- 挿絵や資料に着目して読み取ることで、本文の内容以外のことに気づき、意欲的に読みを深めることができるようになった。
- 本文の内容を根拠に、自分の考えを書いたり、伝えたりできるようになった児童が増えた。
- 何をどのように書くか内容や順番、分量などモデル文があることで、安心して書く活動に取り組むことができた。
- いろいろな生活場面の中で、どのような声掛けをするのが良いか言葉を選び、自分の言葉で伝えることができるようになった。
- 長文から大事な言葉や文・キーワードを見つけられるようになった。
- 資料から分かることを読み取ったり、要約したりする力がついた。

#### (2) 今後の課題

語彙力は高まったものの、言葉の使い方に課題が残るので、さらに表現力を高める指導・支援の工夫が必要である。また、昨今増えている外国籍の児童や発達に特性のある児童に対して、語彙力や表現力を高めるため、一斉指導だけでなく個別の指導も必要である。